

29-0822 W113-6

サラゾスルファピリジンの二次性無効例に対するメトトレキサートおよびブシラミンの有効性

○河崎 陽一^{1,2}, 森山 雅弘², 柴田 和彦^{1,2}, 五味田 裕^{1,2} (¹岡山大院医歯,²岡山大病院薬)

【目的】関節リウマチ(RA)の治療に疾患修飾性抗リウマチ薬(DMARDs)が用いられるが二次性無効(エスケープ)に陥った場合の薬剤選択に明確な基準がない。今回二次性無効後の薬剤の中で特に使用頻度の高かったサラゾスルファピリジン(SASP)からブシラミン(BC)変更群(SASP→BC)、SASP からメトトレキサート(MTX)変更群(SASP→MTX)および SASP+MTX 追加併用群(SASP+MTX)における RA の活動性の指標である C-反応性蛋白(CRP)および赤血球沈降速度(ESR)の変動を指標に有効性を比較検討した。

【方法】対象は平成15年5月までの4年間にRAでDMARDsを服用した外来患者とした。

【結果および考察】二次性無効発現後のSASP→MTX群におけるCRPの変動は3ヶ月以降に低下傾向を示した。一方、SASP→BC群、SASP+MTX群におけるCRPの変動は3ヶ月以降も低下傾向を示さなかった。また、ESRの変動についても同様の傾向を示した。二次性無効発現後の各群での有効性の検討では、SASP→BC群で1件無効例が認められたが、その他の群で無効例は認められなかった。副作用による中止はSASP→MTX群で全身掻痒感が1件認められたが、その他の群では認められなかった。副作用が発現しても投薬を継続した例はSASP→MTX群で疲労感、湿疹、しびれ、息切れの4件、SASP+MTX群で肝機能異常、湿疹の2件が認められ、SASP→BC群では認められなかった。以上のことより、併用療法が単剤療法より大きな治療効果を示すことが多いのではなく、併用療法が必ずしも特別な治療効果を示さないことがあることを念頭に置く必要があると考えられる。また、薬剤師がDMARDsにおける二次性無効後の特徴を把握しておくことはRAの治療における薬剤の適正使用の点からも非常に重要であり、患者QOL向上にも寄与できると考えられる。